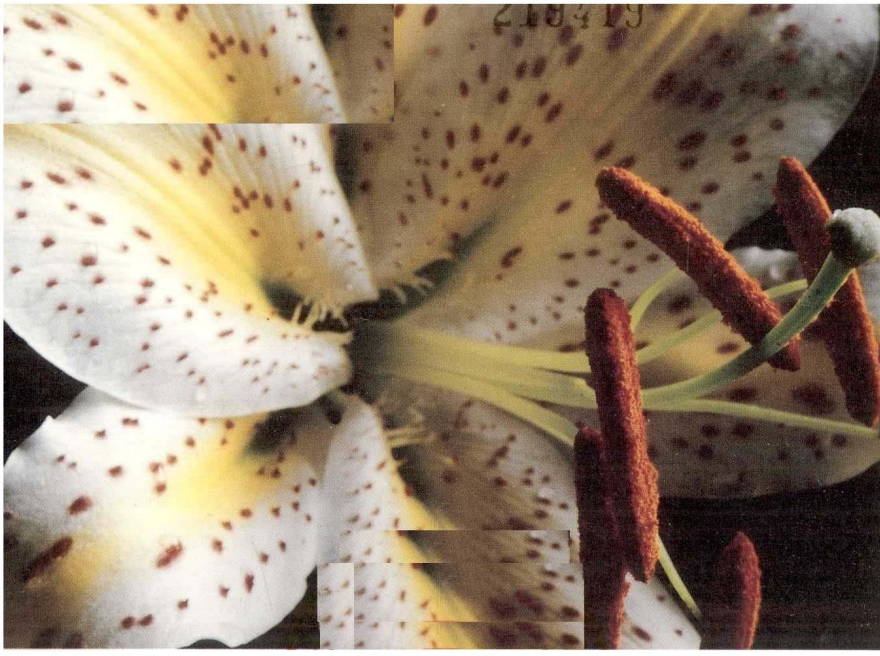
塚谷裕一

漱石の白くない白百合



漱石の白くない白百合

塚谷裕一

文藝春秋

塚谷裕一（つかやひろかず）
一九六四年鎌倉市生まれ。神奈川県立湘南高校、東京大学理学部植物学教室を経て、一九九三年三月、東京大学大学院理学系研究科植物学専攻博士課程を修了、博士（理学）を取得。著書として『ラボマニュアル植物遺伝子の機能解析』（岩淵雅樹・志村令郎編、丸善　一九九二年　分担執筆）がある。現在日本学術振興会PD特別研究員。

漱石の白くない白百合

一九九三年四月二十五日　第一刷

定価はカバーに表示してあります

著者　塚谷裕一

発行者　新井信

発行所　株式会社　文藝春秋
〒一〇二　東京都千代田区紀尾井町三―二三
電話　〇三（三二六五）一二一一

本文印刷　理想社
付物印刷　大日本印刷
製本　大口製本

万一落丁乱丁の場合は送料当社負担でお取替えいたします。小社営業部宛にお送り下さい

© Hirokazu Tsukaya 1993　Printed in Japan
ISBN 4-16-347470-6　C0095

漱石の白くない白百合　もくじ

I

泉鏡花描く紅茸　9
志賀直哉と藤の巻き方　17
漱石の白くない白百合　27
『デンドロカカリヤ』異聞　34
スイートピーは悲しみをのせて　横光利一　43
洋蘭今昔　三島由紀夫　49
朝顔と漱石　58
三島由紀夫と松の木の逸話　65
毒草を活けた水を飲む事　鏡花・漱石　75

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

再説三島と松の木の逸話　82

II

〝動物派〟井伏鱒二の科学用語　93

『虞美人草』の花々　104

クロユリ登場　116

描かれた山百合の謎　137

『金色夜叉』の山百合　175

III

「ごんごんごま」とは？　187

紅葉のメカニズムと『伊勢物語』　195

関東大震災でカビた街　203
小説とチフスの役割　214
小石川植物園を読む　237
あとがき　250

漱石の白くない白百合

装幀　中島かほる

カバーの百合絵　横浜植木株式会社資料提供

章扉カット　著者

I

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

泉鏡花描く紅茸

日本が茸の豊富な国だとはとんでもない、と朝日新聞のコラムで作家の高橋治氏が書いている。たった三、四種の決まり切った種類の茸が季節も何もなしに出回っているだけの国のどこが、というのが氏の趣旨で、私も同感である。しめじといって売っているのを買えば実はヒラタケの栽培品で、それならといって今度はほんしめじというのを買えば、これがシロタモギタケの栽培品種というのだから目も当てられない。ニセしめじしか手に入らないというのに、そして松茸は高嶺の花ときているのに、「匂いまつたけ味しめじ」という文句だけは人口に膾炙(かいしゃ)している。

まだある。ナメコといえば、まだほんのつぼみの、それも水で煮て味もしなくなったようなのばかり。ナメコの大きく膨らんで堂々としたやつの、焼いたりバタ炒めにした味をほとんどの日本人は知らない。エノキタケも沢山売っているけれどモヤシエノキタケばかり。光を浴びて茶褐

色に育った、匂いのきついエノキタケとなると、味はおろか目の前にぶら下がっていても恐らくだれも気が付かない。

いったい、毒でもなければ特においしくもない茸となると、どんなに美しくても相手にされないのはどうしたことだろう。この点は、食用ならずとも美しくさえあれば、その価値が認められるようになって久しい植物との、大きな違いである。

そもそも、毒きのこと食べられるきのことを正しく区別できる人はどれだけいるだろう。縦に裂けるのだの赤くないのだのと、なんの役にもたたない俗信ばかりはびこっている。茸と見ると触るのも怖がる人の何と多いことか。アウトドアブームにのってきのこ狩りが少しはやりだすと、途端に中毒事件が増えるのも、まだ茸に関して日本がそういう誤解を払拭できていないからであろう。

そんな背景があってか、日本の近代文学作品の中では茸にほとんどお目に掛かることがない。食事の場面には鍋か何かになってマツタケなどが出てくることもあるかもしれないが、葱やら春菊やらには負けている。

それでもあれこれ作品を見ていくと、皆無ではないことがわかった。三島由紀夫や泉鏡花の作品では「生きた」茸に出会うことができる。とりわけ泉鏡花の場合は、茸が大事な場面に出て来る作品をいくつも残している。しかもその扱いが食べるものとしてばかりでない点から言っても例外的といってよい。鏡花の特徴は、茸を人間の喩えに使うところで、たとえば人間に絶望した

親子を中心に据えた作品、『化鳥』（明治三十年四月）ではこんなユニークな表現が出てくる。

釣りをしてますのは、ね、先生、とまた其時先生にさういひました。あれは人間ぢやあない、蕈なんで、御覧なさい。片手懐つて、ぬうと立つて、笠を被つてる姿といふものは、堤防の上に一本占治茸が生えたのに違ひません。

夕方になつて、ひよろ長い影がさして、薄暗い鼠色の立姿にでもなると、ます〳〵占治茸で、ずつと遠い〳〵処まで一ならびに、十人も三十人も、小さいのだの、大きいのだの、短いのだの、長いのだの、一番橋手前のを頭にして、さかり時は毎日五六十本も出来るので、また彼処此方に五六人づゝも一団になつてるのは、千本しめぢッて、くさ〳〵に生えて居る、それは小さいのだ。木だの、草だのだと、風が吹くと動くんだけれど、蕈だから、あの、蕈だからゆつさりとしもしませぬ。これが智慧があつて釣をする人間で、些少も動かない。其間に魚は皆で悠々と泳いであるいて居ますわ。

『化鳥』では釣人の喩えなのでシメジしか出てこないが、鏡花はしばしば、女性に関しては茸の中でも紅茸（ベニタケ）で喩えることを好んだ。

たとえば、『茸の舞姫』（大正七年四月）という作品がある。この作品の主人公、杢若は八、九年前に「天狗に攫はれ」て「以来、未だ嘗て火食をしない」。「多くは果物を餌とする」が、菜食

主義というわけではなく、小鳥でもなんでも生で食べる。ただし杢若の母は「人魚になつた」と伝えられるように、彼等母子には魚に縁のある魔がさしているらしく、「但、魚類に至つては、金魚も目高も決して食はぬ」。そんな杢若が「最も得意なのは、も一つ茸で」、「此にばかりは、露のやうなよだれを垂し、『牛肉のひれや、人間の娘より、柔々として膏が滴る……甘味ぞのッ』」と言うとある。ここでまず、彼にとっては「人間の娘」と茸とは同等であるということが暗示されるわけである。

このことは、しばらく読み進むとより明らかに示される。すなわち、その杢若が売る「いろ〳〵の虫の死骸」で彩られた蜘蛛の巣は、杢若が言うには「お姫様が着さつしやる」もの、そのお姫様は「紅茸」で、「薄紅うて、白うて、美い綺麗な婦人」だという。さらに、その侍女も「矢張り、はあ、真白な膚に薄紅のさした紅茸だあね。おなじものでも位が違ふ」とあるから、完全に彼の世界にとっては娘と紅茸は等価なのである。

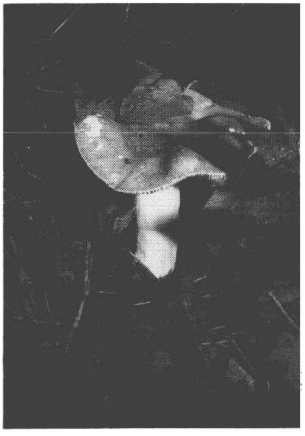
この関係は杢若の頭の中での話にとどまることなく、話が進行するにつれて、ついに現実世界を侵し始める。まず裸になって杢若にこの蜘蛛の巣を求める「廓の芸妓三人」が現われ、これに続いて「十日を措かず」一人の「町内の娘」が「白昼、素裸に成つて格子から抜けて出」ていってしまうという事態に発展する。ついには、「市の町々から、やがて、木蓮が散るやうに、幾人となく女が舞込む」に至るのだから、これはひどい。この近辺ではついに、若い女性は皆、杢若の魔界に自ら飛び込んで人間ならぬ身、紅茸となってしまうのである。しかし、それにしても鏡

花は紅茸で何を象徴させたつもりなのだろうか。

紅茸の意味を読み解くには、もう一つ『木の子説法』（昭和五年九月）の例を見るのが適当であろう。この小説では、上演される狂言が観客の一樹（いちじゅ）の回想話と互いに近接して行く過程があり、その間に多数の茸の名があげられる。これらの茸はあまり重要ではないが、クライマックスの紅茸は鮮烈である。山伏の役に扮するお雪が、以前に一樹との間にもうけていた「不義の子」の登場をきっかけとして、舞台上にありながら現実に引き戻される場面、この現実と狂言とが融和したところで、お雪は自分をさして最後にこう言い残す。

「お客さん――これは人間ではありません。――紅茸です」

ここでお雪は、不義を公の場で露呈してしまった以上、もはや人ならぬ身となっており、舞台にあって紅茸なのである。



ベニタケ

ベニテングタケ

この二つの作品に共通する、紅茸が人の道を踏み外した女性の化身だという構図に注目したい。その基底には、どうも、鏡花が紅茸の色彩の美しさに着目していたこと、さらに、紅茸を毒きのこと誤解していたことがあるようだ。毒だと思っていた証拠に、登場人物の杢若によれば、「二人の婦人」（＝紅茸）は、「毒だ言ふて川下へ流されたのが遁げて来た」ものであるし、「予」の茸狩りで始まる明治三十年七月発表の作品『清心庵』には、次のようにはっきりと毒だという記述が出て来る。

「え、お前様、其奴あ、うつかりしようもんなら殺られますぜ。紅茸といつてね、見ると綺麗でさ。それ、表は紅を流したやうで、裏はハア真白で、茸の中ぢやあ一番うつくしいんだけんど、食べられましねえ。」

明らかに、鏡花は紅茸を美しいと感じ、その一方で猛毒とも思っていたのである。だからこそ紅茸は、作品においては、人ならぬ身となった美しき女性の化身として用いられたのであろう。きれいな薔薇には刺があるというわけである。

ベニタケ属（*Russula*）に属する茸には実に多数の種類があって、藍色あり、白あり、黄あり、緑ありと色とりどりの上に、中には猛毒の種類もあるが、しかし、代表的な、その名の通りの紅のものはまず無毒と思ってよい。中でも鏡花の表現「表は紅を流したやうで、裏は」「真白」で、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com